

# 子どもたちの未来を守るために

ヴァイオリニスト 川井 郁子  
KAWAI IKUKO



© 国連UNHCR協会

## PROFILE

香川県出身。東京藝術大学大学院修了。日本以外にアジアでも音楽活動を行い、2008年にアメリカデビューを果たす。07年に「川井郁子Mother Hand基金」を設立し、全国でチャリティーコンサートを開催。国連UNHCR協会評議員として、07年にタイ、08年にウガンダの難民キャンプを訪れている。

子どもを産んでから、“命の尊さ”をより強く感じるようになりました。そして、テレビに映し出される開発途上国の子どもたちのことが頭を離れなくなつて。音楽を通じて何かできないかと思い、「川井郁子 Mother Hand 基金」を設立しました。音楽に与えられた使命の一つは、“社会に還元すること”だというのが常にあったというのも理由でした。

しばらくは基金主催のチャリティーコンサートが主な活動でしたが、現地の子どもたちに直接音楽を届けたい、そして日本の人たちに途上国の現状を伝えたいと思い、2007年11月にタイの難民キャンプを訪れました。

キャンプでは、仮設テントでミニコンサートを開いたんですが、たくさんの子どもたちが食い入るように私の演奏を聞いてくれました。もうテント

によじ登るような勢いで「これがヴァイオリンの音なの?」と、キラキラした笑顔を向けてくれて。そんな彼らを見て、自分が小さいころ、初めてヴァイオリンを手にしてときめいたときの感覚を思い出しました。シンプルな演奏でも、これだけ通じるんだって。自分の音楽の原点に戻るきっかけにもなりました。

そして08年11月には、ウガンダの難民キャンプへ。実は勝手な思い込みで“つらい状況にある国”というイメージが強かったんですが、土地から感じるエネルギーというか、底知れぬパワーを感じました。難民の人たちの暮らしは、想像を絶するほど過酷なものです。日々懸命に、感謝の気持ちを忘れず生きている姿に感銘を受けました。

どこの国でも、子どもたちの持っているパワーは無限大です。今必

要なのは、学校や病院など、彼らを守ってあげる環境を整えることだと思います。子どもたちにどのような“芽”を植えていかで、地球の未来が変わってくると思うから。

私たちができることは、世界の問題の大きさからしたら微力かもしれませんが、知れば知るほど無力感があります。絶対にあきらめてはいけな、あきらめたくないと思います。

日本ではまだまだ、ボランティアは特別な人がやることだと思われがちです。でも、それは自分の利益にもなると考えてみてはどうでしょうか。誰かのために汗を流すのは、とても心地のよいもの。生きがいや、仕事のやりがい何倍にもなるし、どんなに嫌なことがあっても、一番好きな自分でいられる瞬間です。まずは、“何かやりたい”という気持ちを大切にしてほしいと思います。